

# 都の友へ、B生より

国木田独歩

青空文庫



## (前略)

ひさ 久しぶりで孤獨の生活を行つて居る、これも病氣のお蔭  
 かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を  
 じかく 自覺したやうな氣がする。これは全く孤獨のお蔭だらうと思ふ。  
 このをんせん 此温泉が果して物質的に僕の健康に效能があるか無いか、  
 こと そんな事は解らないが何しろ温泉は悪くない。少くとも此處の、  
 このや 此家の温泉は悪くない。

しんかん 森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな  
 いでゆ 温泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感か  
 らも、夢のやうな妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ

こうなうのせ  
後脳を乗て一端へ爪先を掛けて、ふわりと身を浮べて眼を閉る。  
ときうすめあけてんじやうぎはあかりまどみみどりきらきり  
時に薄目を開て天井際の光線窓を見る。碧に煌めく桐の葉  
はんぶん  
の半分と、蒼々無際限の大空が見える。老人なら南無  
あみだぶつ  
阿彌陀佛くく口の中で唱へる所だ。老人でなくとも此心  
持ちは同じである。

へやかへ  
居室に歸つて見ると、ちやんと整頓て居る。出る時は書物  
ほご  
やら反古やら亂雑極まつて居たのが、物各々所を得て靜かに  
ぼくまつあ  
僕を待て居る。ごろりと轉げて大の字なり、坐團布を引寄せて二  
をつまくら  
つに折て枕にして又も手當次第の書を読み初める。陶淵明の  
いはゆ  
所謂「不求甚解」位は未だ可いが時に一ページ讀むに一時間も  
かゝる事がある。何故なら全然で他の事を考へて居るからである。

きのふ きみ おく  
昨日も君の送つて呉れたチエホフの短篇集を讀んで居ると、ツ  
イ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの 本名は權十とか五郎兵衛とかいふのだらうけ  
れど、此土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事を

して居た。

此以前僕が此處へ來た時の事である、或日の午後僕は溪流の  
下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全たく僕の氣に  
入つたのである、後背の岨からは雜木が枝を重ね葉を重ねて被ひ  
かゝり、前は可り廣い澱が靜に渦を卷て流れて居る。足場はわざ  
く作つた様に思はれる程、具合が可い。此處を發見た時、僕は  
思つた此處で釣るなら釣れないでも半日位は辛棒が出来る

とおも  
と思つた。ところぼく  
と唐突に聲を掛けた者がある。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七

十近い、背は低いが骨太の老人で矢張釣竿を持て居る。

『今初めた計りです。』と言ふ中、浮木がグイと沈んだから合

すと、餌釣としては、中々大いのが上つた。

『此處は可なり釣れます。』と老爺は僕の直ぐ傍に腰を下して

煙草を喫ひだした。けれど一人が竿を出し得る丈の場處だからボ

ズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、

『旦那はお上手だ。』

『だめだよ。』

『イヤさうでない。』

『これでも上手の中かね。』

『此温泉このをんせんに來るお客さんの中うちじア旦那だんなが一等だ。』と大げさに

贊ほめそやす。

『何しろ道具どうぐが可い。』と言はれたので僕は思はず噴飯ふきだし、

『それじア道具どうぐが釣つるのだ、ハ、ハ、……』

ボズさん少すこしく狼狽まごついて、

『イヤ其それは誰だれだつて道具どうぐに由よります。如何いから上手じやうずでも道具どうぐが悪わる

いと十尾釣びきつれるところは五尾ひきも釣つれません。』

それから二人種々ふたりいろくの談話はなしをして居をる中に懇意こんいになり、ボズさ

んが遠慮なく言ふ處によると僕の發見た場所はボズさんのあじ  
ろのひとつ、足場はボズさんが作つた事、東京の客が連れて行  
けといふから一緒にいっしょに出ると下手の癖に釣れないと怒つて直ぐ止  
す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に  
来る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜しい  
といふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛けて居たが、  
ボズさんの家は一室しかない古い茅屋で其處へ獨でわびしげに住  
んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人が身の上の事は  
成る可く避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き  
出した處によると、田之浦の者で倅夫婦は百姓をして可な



りの生活くらしをして居ゐるが、其夫婦そのふうふのしうちが氣きに喰くぬと言いつて十何な年ねんも前まへから一人ひとりで此處こゝに住すんで居ゐるらしい、そして倅せがれから食くふだけの仕送りしおくを爲して貰もらつて居ゐる様子やうすである。成程なるほどさう言いへば何處どこか固掘かたくなのところもあるが、僕ぼくの思おもふには最初さいしよは頑固ぐわんこで行やつたのながら後のちには却かへつて孤獨こどくのわび住すひが氣樂きらくになつて來たのではあるまいか。世よを遁のがれた人ひとの趣おもむきがあるのは其理そのわけ由よしであらう。

其處そこで僕ぼくは昨日きのふチエホフの『ブラツクモンク』を讀よみ思おもはずボズさんの事ことを考かんがへ出だし、其以前そのいぜん二人ふたりが溪流たにがはの奥深おくふかく沂さかつて「やまめ」を釣つつた事ことなど、それからそれへと考かんがへると堪たまらなくなつて來た。實じつは今度こんど來て見みると、ボズさんが居ゐない。昨年きよねん

田之浦たのうらの本家うちへ歸かへつて亡なくなつたとの事ことである。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはあり／＼と見える、菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立て居る。

『病氣に良くない、』『雨が降りさうですから』など宿の者が

とめるのも聞かず、僕は竿を持って出掛けた。人家を離れて四五丁も浜ると既に路もなければ畑もない。たゞ左右の斷崖と其

間を迂回し流るゝ溪水ばかりである。瀬を辿つて奥へ奥へと

浜るに連れて、此處彼處、舊遊の澱の小蔭にはボズさんの菅

笠が見えるやうである。嘗てボズさんと辨當を食べた事のあ

る、平い岩まで來ると、流石に僕も疲れて了つた。元より釣る氣

は少しもない。岩の上へ立てジツとして居ると寂しいこと、靜か

なこと、深谷の氣が身に迫つて來る。

暫時しばらくすると箱根はこねへ越こす峻嶺しゅんれいから雨あめを吹ふき下おろして來きた、霧きりのやうな雨あめが斜ななめに僕ぼくを掠かすめて飛とぶ。直すぐ頭あたまの上うへの草山くさやまを灰はひ色いろの雲くもが切きれ／＼になつて駈はしる。

『ボズさん！』と僕は思おもはず涙なみだ聲こゑで呼よんだ。君きみ、狂氣きちがひの眞ま似ねをすと言いひ玉たまふか。僕ぼくは實じつに滿眼まんがんの涙なみだを落おつるに任まかした。

(畧)



# 青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第四卷」学習研究社

1966（昭和41）年2月10日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 都の友へ、B 生より

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>